【別紙様式Ⅰ】 令和4年度　学校評価報告書

学校名　厚木市立小鮎小学校

校長名　江上　純子

厚木市教育委員会の基本目標	1　自ら学び、鍛え、未来を拓き、夢や可能性に挑み続ける力の育成 【挑戦】 2　自他の命や豊かな感性を大切にし、多様性を認めながら共に生きていく力の育成 【共生】 3　変化する社会に自ら進んで関わり、人々と協働してより良い社会を創る力の育成 【創造】

学校教育目標	学校経営の方針
豊かな心と、たくましく生きる力をもった児童の育成	「こ」根気強く自分で考える子 「あ」明るく元気な子 「ゆ」豊かな心で思いやりのある子

今年度の重点目標

【教育総部務】学校管理体制の確立　チーム小鮎の体制づくり・・・学校運営組織の活性・地域とともにある学校づくり・PDCAサイクルによる学校評価・働き方改革の推進
【まなびづくり】基礎・基本の定着　主体的に学ぶ力の育成・・・基礎・基本の定着・授業改善・読書活動の充実・情報活用能力・道徳教育の充実
【からだづくり】自分の命は自分で守る・・・基本的な生活習慣の確立・安全教育の推進・清掃活動の充実
【こころづくり】自己肯定感を育む　互いに認め合う心・・・児童を主体とした活動・児童指導、支援体制の充実

評価項目・指標等	基本目標との関連	具体的な取組	成果と課題	次年度への具体的な改善策
【教育総務部】 〇学校運営の活性化 〇地域とともにある学校づくり 〇PDCAサイクルによる学校評価 〇働き方改革の推進	1・2・3	【学校運営の活性化】 ・グループリーダー中心 ・グループ活動活性化 ・PDCAサイクルの確立 【地域とともにある学校づくり】 ・社会に開かれた教育課程の編成 ・関係機関、団体との連携 【PDCAサイクルによる学校評価】 ・年2回の学校評価 ・全職員によるカリマネ会議の実施 ・学校運営協議会と連携 【働き方改革の推進】 ・ICTの活用 ・小鮎小スタンダードの作成 ・学年担任制の推進	PDCAサイクルを意識し（CAP－DO）学校を運営していく意識がついてきた。 学校運営協議会委員さんとともに、学校教育目標の達成を目指した学校運営を行うことできた。また、「応援し隊」を発足し、「地域とともにある学校づくり」が進んだ。 教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有し、必要な学習内容をどのように学び、どのように資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現に関する保護者等への周知が課題である。	チーム小鮎として、全教職員で全校児童を見守っていける体制づくりを目指す。 「地域とともにある学校づくり」を目指し、「小鮎小応援し隊」の方々と連携をして、全校児童を育てていく。加えて、PTAや地域の方々とも力を合わせていく。 子どもたちが生き生きと安心して学校生活を送ることができるように、安全教育も推進し、感染対策を取りながら、教育計画を工夫して進めていく。

【まなびづくり部】 〇基礎基本の定着 〇授業改善 〇読書活動の充実 〇情報活用能力 〇道徳教育の充実	1	【基礎基本の定着】 ・生きて働く知識・技能の育成 ・校内研究、研修の充実 【授業改善】 ・見通しをもって主体的・対話的に学べる単元づくり ・学びの個別最適化 ・授業のUD化 【読書活動の充実】 ・継続的な朝読書 ・関心を高める工夫 ・お話しボラとの連携 【情報活用能力】 ・総合的な学習の時間の充実 ・情報モラル教育 ・Chromebookの活用 【道徳教育の充実】	「みんなが分かる　自分で学ぶ～生きてはたらく学力の向上をめざして～」という研究主題を元に、授業改善に取り組んだ。 教科書を基盤とした教材研究に取り組むとともに、研修会を積極的に開き、授業改善への意識を高めることができた。 知識技能の育成について、覚える→分かる→使えるというプロセスを意識することにより、身に付けさせたい資質能力を明確にしながら指導することができた。 読書を習慣化するために、図書室において様々な取組をしてきた。今後とも読書活動が豊かな感性の育成や語彙力の向上につながることを意識して、意図的に本を読む時間を設定していく。 ICT機器の適切な活用に関しては、まだまだ改善の余地がある。学びの最適化を目指し、個別最適な学習が展開されるよう、有効にICT機器を活用していく必要性がある。	「基礎・基本の定着」と「校内研究・研修の充実」に重点を置き、生きて働く知識・技能の育成を図るための授業づくりの推進に引き続き努めていく。 児童が自分たちで考える時間や考えたことを表現する時間をより大切にした授業を組み立てることを推進していく。 さらに自分の考えをもち、教え合い学び合いながら主体的に生き生きと学習に取り組める子どもの育成を目指す。また、主体的に課題を見つけ、学習に向かう力の育成を図る。
【からだづくり部】 〇基本的な生活習慣の確立 〇安全教育の推進 〇清掃活動の充実	3	【基本的な生活習慣の確立】 ・生活リズムを整える ・外遊びのすすめ ・体育的行事の推進 ・健康教育の充実 ・食育の充実 ・家庭との連携 【安全教育の推進】 ・危機管理体制の確立 ・地域と連携、協働による活動の創造 ・避難訓練の工夫・充実 【清掃活動の充実】 ・縦割り活動で主体性を育む ・協働、奉仕の心を育む	自分の命は自分で守るため、学期ごとに火災や地震、不審者侵入など様々な状況を設定した避難訓練を実施することができた。 自分の命は自分で守るという意識の高まりは見えたものの、訓練であるという気持ちのゆるみが見られる時があった。当たり前を当たり前にできる、訓練をきちんとすることにより自分の命も他の人の命も守るという意識を向上させていくことが課題である 栄養士の授業や学校保健委員会、児童朝会など様々な場面において、食の大切さについて考えさせることができた。 外遊び月間等を通して、外へ出て運動しようとする態度が育った。休み時間には縄跳びを持ち、外で遊ぶ子どもたちの姿が多くみられた。 特別な取組をしている期間だけで体力づくりを行うのではなく、年間を通しての体力向上のためのに行う取組が課題としてある。 安全のため、子どもたちに廊下歩行が課題として残った。	「健やかな体づくり」「健康教育」「清掃活動の充実」に重点を置き、健康教育や清掃活動の推進に引き続き努めていく。 「自分の命は自分で守る」のスローガンのもと、体育の授業を中心に健やかな体づくりの活動を充実させ、自分の命を大切にする健康教育の推進や地域と協働したきれいな学校づくりを行っていく。 進んで挨拶ができるなど子どもの育成を図る。 子どもたちが日常生活で、状況に応じて危機回避ができる能力の育成に努める。 子どもたち自身で体調管理ができるなど、自己管理能力の向上を図る。

【こころづくり部】 〇児童を主体とした活動 〇児童指導・支援体制の充実	2	【児童を主体とした活動】 ・学級活動の充実 ・児童会活動の活性化 ・委員会の常時活動の工夫 ・異年齢集団の効果的活用 【児童指導・支援体制の充実】 ・定期的な情報の共有 ・関係機関・専門家との連携 ・教育相談の実施 ・いじめの共通理解 ・小鮎小スタンダード ・生活アンケート	新たにコーディネーター会議を発足するなど、児童理解に関する情報共有はよくでき、チームでの対応に努めることができた。 生活アンケートを活用し、児童の実態を把握しながら関係機関とも効果的な連携をもつことができた。 規範意識の向上のため、当たり前7か条をつくった。まだまだ、当たり前7か条にあげられていることが、本当の意味で当たり前にできるようになっていないことが課題である。 児童の困り感への早期発見・対応に努めてきたが、自己肯定感が低い児童や、周りとの協調性が十分ではない児童がまだ多いことが課題として残った。 学習面で支援を必要とする児童について、保護者の理解を得ながら、取り出し指導や学級内支援を行ったことで、学習に対する意欲の向上や内容の理解など、目に見える成果があがっている。しかし、対象児童が増加しているため、指導体制の整備には課題がある。	「児童を主体とした活動」や「児童指導・支援の充実」に重点を置き、児童会活動を中心とした特別活動の活性化や個に応じた支援体制の充実を図る。 インクルーシブ教育を推進していく中で、児童一人一人が安心して活動できる環境づくりに全教職員で取り組んでいく。 豊かな心で思いやりがあるとともに、自他を大切にする子どもの育成に努める。 多様性を認め合い、望ましい集団や人間関係の中から自己肯定感を育む。

今年度の学校関係者評価委員会からの意見

コロナ禍で、前年度開催すらできなかったことを考えると、学校運営協議会として、行事ごとに学校と関わりがもてたのはよかった。また、発足したての「応援し隊」の計画を、今年度中に実施できたことが大きかった。ピンクベストを着た「応援し隊」が、学校生活の中の様々な場面で子どもたちのために活動することができた。

今後、普段の授業や活動でより気軽に子どもたちと関われる機会があればよいと考える。その中で、ピンクベストを着用した地域の人たちが、たくさんの子どもと話し、褒めたり叱ったり、受け入れたりすることで、子どもたちの自己肯定感を高めていきたい。また、地域として、子どもたちに顔を覚えてもらう、安心感をもってもらうという中で、「見守ってくれている人」「相談できる人」「安心できる人」を増やしていきたい。ただ、「応援し隊」の勧誘や紹介の仕方については考えていかなければならい。

インターネットの広告には出会い系サイト、性的描写などが多くあり、子どもたちの目に入る事を防ぐことは難しい。また、心に隙間がある子どもに対する犯罪が多く、SNSという出会いの場も広がってきている。情報モラルや性教育の指導については、早めに行いたい。子どもたちの心の隙間を地域、学校で埋めていきたい。また、自分で考え判断できる力を育てたい。

学校は担任一人で動いているのではなく、組織で動いているということ、また、地域とともに学校を創り上げるために組織された「応援し隊」のことなどを積極的に保護者や地域に周知してほしい。

今年度の学校経営のまとめ ・ 次年度への改善の方針
学校教育目標の実現のため、めざす児童像を教職員、児童、保護者、地域と共通理解して取り組んできた。 インクルーシブ教育の推進のため、豊かな心が育ち、一人一人が自分の良さを伸ばし、たくましく生きる力が育つ教育環境の土台作りに努めてきた。また、いじめ認知について全校職員での共通理解、1学期の児童指導全体会での研修、ピンクシャツデーの実施などいじめを防止するための対策を講じてきた。 全教職員が全児童を支援する体制として、学年担任制への移行とサポートタイムという支援体制の構築に努めた。 生きて働く知識・技能を育成するために、まず教職員が生きて働く知識・技能や基礎・基本とは何かということを共通理解した上で授業改善を進めた。また、教材研究、研修の時間を確保するために、学年担任制や教育課程の工夫、勤務時間の明確化、ペーパーレス化、グループ活動の活性化、総括のリーダーシップ、児童指導・支援の記録の一元化など働き方改革を進めてきた。 次年度は、「豊かな心と、たくましく生きる力をもった児童が育つ学校」を目指し、子どもが自分で考え、主体的に学習ができるように授業改善に取り組む。さらに、子どもが、友達や教師、地域の方々など、様々な人と協働的に学ぶ力が育つよう、総合的な学習の時間や特別活動の時間について工夫をしていく。 一人一人が自分の良さを伸ばし、いきいきと課題に対して根気強く学ぶことができる力の育成を目指し、学習環境と教育課程をつくる。また、自分の健康、体力及び環境の課題について、自ら考え行動、解決できる力の育成に努める。 自他の命や人権を大切にし、多様性を尊重し、互いに認め合うことのできる思いやりの心が育つ温かい学校づくりを目指すとともに、全教職員の協働体制と学校、保護者、地域、外部専門機関との連携により、子どもたちを育み、チームとして子どもたちの自己肯定感を上げるために活動する。 「誰一人取り残すことのない」支援体制・支援教育、互いに認め合い、思いやりのある行動ができる子どもが育つ教育活動を推進していく。 地域との連携をさらに深め、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、「地域学校協働活動」の推進に努める。また、放課後の時間に、子どもたちが楽しい時間を過ごすことができるように、地域で子どもを育て見守る場をつくっていく。